

憲法九条を守る理由は一つ「戦争がいやだから」

憲法九条に 憶う

池浦 巨谷 学



今から六十五年前、

日本が、世界が、どのような状況にあったか、それ以前の十五年間がどのような状況にあり、その中で国民一人一人が、何を思い、どのように生きてきたのか、知る人は少なくなり、まして、その事を語る人は少なくなりました。

先の大戦によって、日本が、世界が戦禍にさらされ、人間が悲惨な地獄を目のあたりに体感した。まぎれもない事実でした。その惨禍のうえに日本国憲法は、特に第九條は、何よりも平和を最高の価値として創られました。「戦争の永久的放棄」「戦力(軍)の不保持」「交戦権の否認」の三つの柱を世界に向かって宣言し、「平和を誠実に希求する」国民としてあの戦禍を学び、反省し、新しく平和への歩みを始めたのです。あれから六十五年、世界やアジアの情勢は変わり、人間の生活は大きく変わりました。又、その考えや思想も多種多様になり、個人が大きく尊重される時代になりました。その為にもまた様々な問題が、人間にも、社会にも多くなりました。

しかし、しかし、あの地獄のような惨禍を二度と起こさない。起こさせないというその願いは決して変わってはならない願いであると信じます。六十五年前の夏、確かに日本は変わろうとしました。その象徴である「憲法九条」について、又、それを取り巻く状況について、深く考え、憶う夏であつて欲しいと願

います。

忘れ去られようとして居る遺族

別山 早津イサミ 七十八才

戦後六十五年が過ぎようとして居ます。私達遺族会は今年も西山町戦没者慰霊祭を

厳に去る七月十七日神官さん七名をお願いし、県議員さん二名、市議員さん三名を招待し、会員約七十名の参加の元でとり行いました。

国の犠牲となられた五百六十七柱の方々の戦死を風化させてはならない。

若い方々は何も解らない様です。私達遺族会では語り続けて行きたいと思

います。二度とこの様な犠牲者を出さない様、戦争は絶対してはならない。

私達も微力ではありますが、早く明るく楽しい生活が出来る様な社会が来る事を願って居ります。

母として

(H・O) 四十七才



わが子が生まれた日の喜びは忘れられませんが、

生まれてきてくれてありがとうと声をかけました。ただただこの子が幸せになってくれますように、そんな思いで子育てをする毎日。それはすべての母親にとって共通の思いです。国籍や思想、信条などが異なっ

ていても無関係でしょう。

母親たちはどんな時でもわが子を戦場に送りだしたくはありません。

死んでほしくない、人殺しをしてほしくないのです。そんな人生を歩むために大切に育ててきたのではないのです。

戦いで得られるものってなんですか。同じように悲しく、切なく、やるせない思いをする母親・家族が、味方にも相手国にも大勢生まれただけです。

武力ではなく、協議による解決こそ人間の目指すべき道です。そのためにも憲法九条を大切にまもることが不可欠と考えます。

菊のご紋章

別山 寺沢健二郎



また八月十五日が巡ってきた。私達は鮮満国境(今の中国東北部)の凶門で武装解除を受けた。出発に先立ち隊長から「日本軍の潔さと武人の嗜みとして、小銃と帯剣を油布で清拭せよ」と命ぜられ、検査を受けて出発したがそれは無駄であった。

ソ連軍は天皇陛下から賜った銃剣などとは一顧だにせず、只、単なる銃・剣として処理していた。

銃の葉室上部に刻された「菊のご紋章」のために、どれだけの兵隊が苦勞させられ、時には自殺者まででたと聞かされていた。

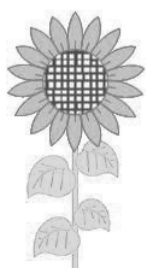
部品の紛失で広い演習場で一列横隊に並び、這いつくばって草むらを探させられたり、銃に土が付いていたと云って三十分以上も「捧げ銃」の制裁を受けたり、銃を首にぶら下げ各班廻りでピンタを取られたり

苦しみの連続であった。

このように軍隊では古年次兵が軍人勅諭の「礼節」の項を自分たちの都合のよいように悪用解釈し、嗜虐的に新兵いじめをしていたのである。

終戦に思う

七十四才 女性



昭和二十年は小学校四年生でした。学校へはカバンのほかに、毎日防空頭巾を持って、いざという時にはこれをかぶって逃げなさいと教えられていました。

学校では今日はタニシ拾い、今日は山のスキの穂を取るんだなどとあまり勉強はしなかつたような気がします。帰り道は友達とB29が爆弾を落としてきたらどこへ隠れようかなどと相談しながら歩きました。

ある夜のこともすごい爆音と一緒にドーン、ドドドーンと何か爆発するような大きな音がしました。西の方の空は真っ赤でなにかが燃え上がるような感じでした。(新潟空襲)

ほんとうに恐ろしい思いをしたことを今でもはつきりと覚えています。

八月十五日、「戦争が終わったぞ(〜)」、大人たちが大声を上げながら走ってゆきました。「やっと終わった」「よかった」「自由になった」。

この日をどんなにかみんなが待ち望んだことでしょう。多くの人たちの犠牲の上になり立った平和、そして戦争放棄の憲法は絶対忘れてはならないと思いました。